

インドに行ってきました

宮原 豊 (9組)

【インド・サールナート再訪】

今回のインド訪問は11月21日～28日の8日間と短期だったが、密度の濃い旅であった。二つの目的があり、一つ目は今まで何回か紹介してきたバラナシ・サールナートの初転法輪寺（ムーラガンダ・クティ・ビハラ）の本堂内に描かれた野生司香雪画伯の壁画修復プロジェクトに協力いただいた365名（総数で400件超の寄付）の方々の名前を刻んだステンレス製銘板を寺院入口外壁に設置するセレモニーに参加すること。そして二つ目は仏跡巡りであった。後者は、インド南西部デカン高原のエローラ・アジャンタの石窟群の壁画を見て、東部のガンジス川下流のブッダガヤで釈尊が悟りを開いた地の菩提樹と大塔を訪れること、そして聖地バラナシでガンジス川の荘厳な日の出を拝み人々の沐浴を見て、サールナート（鹿野苑）でアショーカ王時代の遺跡、考古学博物館を訪問することであった。今回は主に野生司香雪画伯顕彰会の関係者を含む20名の団体旅行であった。ここでは、サールナートのインド国立チベット大学訪問に絞って報告する。



【田中裕子さんによる大学キャンパス案内】

サールナートは、ブッダガヤで悟りを開いた仏陀が初めて弟子に説法した仏教発祥の地であるが、ここはブッダガヤ同様に世界中の仏教徒が巡礼に訪れ、各国（日本、タイ、ベトナム、ミャンマー、中国）の寺院が初転法輪寺（スリランカ寺）を囲むように点在し、このダルマパーラによって建立された初転法輪寺が世界宗教としての仏教にとって特異な存在であることを示している。

↑チベット大学キャンパスで訪問団一同

仏教は世界に普遍的な教えとして認知されており、インドはヒンズー教徒が多数派を占めるもののインド人の世界で活躍する場が広がれば広がる程、世界仏教の存在はインドやインド人にとって有意義なものになるようであるが、それを端的に証明しているのがインド国立チベット大学なのである。

田中裕子さん(5組)が11月2日と6日の二度にわたりHPに投稿した「インドと私」と題する寄稿文を読まれた方も多いと思うが、この大学は中共・人民解放軍から逃れてインドに亡命したダライ・ラマ法王がネルー首相に要請して設立された教育機関だが、この図書館に保存されているチベット仏教の経典、チベット文化、ヒマラヤ一帯に広がる仏教圏における史資料の充実ぶりは世界に類を見ないのである。経典はチベット人が亡命してくる時に肩に担いでヒマラヤ越えしたものである。

【チャムパ・サムテン博士の説明】

田中さんの夫君のチャムパ・サムテン博士（哲学）は、責任者としてこの図書館の整備・充実に貢献さ

れたそうだ。この日は日曜日であったが、10 日ほど前の急な申し入れにも拘らず快く我々を迎え入れ自らキャンパスの要所所を案内していただいた。一方、トラベル・エージェントの旅行企画には入っていなかったが、平均年齢 75 歳という団員は知的好奇心が旺盛で、サムテン博士の説明に耳を傾け、また田中さんの通訳と日本語解説を熱心に聞き、チベット大学訪問の趣旨を十分に理解されたのであった。



チベット仏教經典の並ぶ図書館でサムテン博士と田中裕子さん

【銘板設置のセレモニー】

この日 26 日は満月前夜、年に一度の大例祭の日で、インド大菩提会・初転法輪寺に所蔵されている仏舎利（本物の仏陀の遺骨）が一般公開される日と重なって、何万人もの来館者が訪れるという中で、銘板設置のセレモニーが行われた。この銘板には上田高校関係者の名前も刻まれている。野生司香雪が長野県に所縁があるからといち早く壁画修復プロジェクトに賛同いただいた故・白井透氏（60 期）、篠ノ井の圓福寺藤本光世住職、上田の大輪寺近藤博道住職（66 期）、南澤巖氏（71 期）、サムテン博士・田中裕子さん夫妻の名も連ねられており、施主・初転法輪寺の感謝の意が半永久的に表わされることを嬉しく思う次第である。



設置された銘板を囲んで、
右から田中裕子さん、インド大菩提
会事務総長シーワリー師、サムテン
博士、筆者

(23 年 12 月 2 日記)

以上